

# スタイルの違いに注目した脚本から小説への変換に関する一考察

内田 美友<sup>1</sup> 望月 源<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京外国語大学 言語文化学部 <sup>2</sup>東京外国語大学 大学院総合国際学研究院  
{uchida.miyu.s0,motizuki}@tufs.ac.jp

## 概要

本論文では、脚本を小説化するシステムの構築を検討するため、実際に人手により演劇脚本 38 本を元にした小説化の作業を行い「両者の構造的・形式的な相違点、および含まれる情報の違いはなにか」「機械的に変換できる場所はどこか」「機械的に変換できない場所はどこか」について考察する。脚本から小説への書き換えは、情報が少ない側から多い側への変換となり、脚本特有の表現形式からどのように情報を補完しつつ変換するかが問題となる。

## 1 はじめに

小説の作成方法の一つに、演劇やドラマ、映画などの原作脚本からのノベライズがある。同じ作品を異なるメディアで楽しめることから人気があるが、脚本から小説への書き換えには特有の難しさがある。小説の書き方に触れた文献[4,5,6,7]を比べても書き方に明確な決まりがあるわけではなく、比較的自由であるが、脚本との間には、その形式や構造に大きな違いが見られる。図 1 に同じ内容を表した脚本と小説の例を示す。

<p>【脚本】</p> <p>太郎 先輩が不正をやったってこと？</p> <p>花子、はっと驚く</p> <p>花子 信じられない……</p> <p>太郎 これ、確かめに行くしかないよ</p> <p>花子 そうだね</p> <p>太郎と花子、走り出す</p>	<p>【小説】</p> <p>太郎が</p> <p>「先輩が不正をやったってこと？」と言った。それを聞いた花子が、はっと驚き、「信じられない……」と言った。</p> <p>「これ、確かめに行くしかないよ」</p> <p>「そうだね」</p> <p>太郎と花子はそう話した後、走り出した。</p>
---	---

図 1 同じ内容を表す脚本と小説の例

図 1 で、脚本と小説には次の違いがみられる。

- 台詞の発話者の明示方法：  
脚本では発話者を台詞の前に書いているの

に対し、小説では発話者を台詞の前に書く形式は用いられていない。

- 鉤括弧使用の有無：  
脚本では、台詞に対し「」を用いないが、小説では、「」が使用されている。
- 助詞「が」「は」の使用の有無：  
脚本では主語を提示するための助詞「が」「は」が使用されておらず、主語のあとに「、」を入れている。それに対し、小説では使用されている。

このように、同じ内容であっても、脚本と小説には異なる構造や使用する単語などの相違があり、表現方法が異なっている。

また、脚本では、感情やアクション、気持ちは通常書かれず、舞台上演じる役者や演出家によって考えられることを前提にしている。一方、小説は文字情報だけですべてを完結させるという前提で書かれている。一般に、記述される表現の量に「脚本<小説」という関係が成り立つ。

そのため、脚本を小説化するには、内容を保持するだけでなく、両者の違いを踏まえた上で、脚本には記述されない情報を小説では補完する必要も生じる。しかしながら、脚本の小説化という観点から、両者の形式的、構造的な類似点や相違点を調査し、変換に必要な知識について研究を行うことは、これまであまり試みられてこなかった。

そこで、本研究では、実際に演劇で用いられている脚本を用いて、小説への変換を人手によって行う。この小説化の作業を記録し、調査することで、「両者の構造的・形式的な相違点、および含まれる情報の違いはなにか」「機械的に変換できる場所はどこか」「機械的に変換できない場所はどこか」について、考察する[1]。

## 2 関連研究

本研究の逆、物語小説から演劇脚本への自動書き換えのシステム構築を念頭に置いた研究として、金子らの研究がある[2]。金子らは、台詞とその話者

を特定するタスク、台本のト書きに採用すべき動詞句を抽出しその動作主を特定するタスク、小説内の場面の区切りを認識するタスク、実際に台本に採用する場面を選択するタスク、と段階的に分けて自動書き換えシステムのためのアノテーション方法を提案している。金子らが取り組んでいる小説から台本への変換では、小説に情報として多く含まれる場面の中から台本にとってより重要な場面を選択する、情報の絞り込みにひとつの重点がある。一方、我々の研究では、情報の少ない脚本から小説への変換において、適切な表現を補うための情報の補完に重点がある。また、金らの研究では、日本の昔話を原本として、台詞とト書きを抽出し、台詞の話者を特定する方法を提案している[3]。

### 3 書き換えの実施と分析

#### 3.1 書き換えの条件

本研究では、調査対象として筆者のうち1名が所属している演劇サークル「劇団ダダン」のメンバーが書いた脚本を使用する。本研究のために執筆者9名による38本の脚本の提供を受けた。一覧を付録Aに示す。9名のうち1名は脚本家として仕事を行っており、残りの8名は大学のサークル活動の一環として脚本を執筆している。8名はいわゆる「アマチュア」であるが、本研究の調査では脚本内の「台詞」「ト書き」「場面転換」の違いがはっきりと分かれば十分であると考えられる。この点において、プロとアマチュアの間には大きな書き方の違いはない。

書き換えは普段から演劇に関わり脚本に関する知識を有する大学生1名が次の方針で行なった。

(1)変換対象は脚本に書かれていることのみ限定し、想像し補わなければならない感情やアクション、人物の気持ちなどは対象外とする。(2)小説化で用いる表現を多彩にすることはせず、もっとも一般的な言葉を用いる。結果として小説としては表現が「薄味」なものになる可能性があるが、この点について、今回の調査では考慮の対象外とする。

#### 3.2 自動的・機械的な変換が可能なもの

今回の小説化作業において、比較的容易に、自動的・機械的な変換が可能と考えられる変換パターンとして次の11点が確認された。

1. 台詞の表現 「人物が」と言った」

脚本では「登場人物名＋スペース」の次を台詞と認識し、「登場人物名が「(台詞)」と言った。」という形を基本として変換できる。

2. ト書きの「現在形を過去形に変更」と「動作主の後ろに助詞の追加」

ト書き内で「登場人物名＋読点 ～ 動詞現在形」であれば、動詞の動作主は登場人物であると判断し、小説では、動詞を過去形にし、「登場人物名(が)は～した」という形を基本に変換できる。また、登場人物が複数の場合は人物名を「と」でつなぐ。

3. 動作主の提示がないト書き

ト書き内の動作について、動作主となる登場人物名が明記されていない場合、必ず直前の台詞の発言者が動作主となる。そのため、書き換えでは、前の台詞の発言者を動作主として補えば良い。

4. ト書きの体言止めの変換

脚本ではなるべく簡潔に表現するため、体言止めが多用される。小説では体言止めは作者が何らかの効果を狙うための表現技法として使用される場合を除き、基本的には使用されない。体言止めの違いに応じて次のような変換パターンがある。

4-1 「電話中」など「～中」で終わる場合、「をしている」に変換する。

4-2 「動詞(連体形)+人物名」は、「人物名+が+動詞(現在進行形)」に変換する。

4-3 「形容詞(連体形)+人物名」は、「人物名+は+形容詞(終止形)」に変換する。

4-4 「サ変名詞」の場合、「サ変名詞+した」に変換する。例：登場→登場した

4-5 「動作の対象格となる名詞」は、呼応する述語(過去形)を補完する。例：ため息→ため息をついた

4-6 「形容詞(連体形)+名詞」は、「形容詞+名詞+で」に変換する。例：悲しい顔→悲しい顔で

5. 登場人物名と台詞の間の指示書き

脚本中の台詞には、()で指示書きがなされる場合がある。この指示は、「該当する台詞を次の動作を交えながら発言せよ」という意味合いを持つ。この場合、指示の動作主は台詞の発言者であるが、()の中の文言は台詞ではないため、地の文として扱えるように変換し、人物名+助詞と台詞の間に挿入する。細かく次のパターンに分かれる。

5-1 「人物名(～ながら)」→「人物名は～ながら」

5-2 「人物名(～で)」→「人物名は～で」

5-3 「人物名（～連用形）」→「人物名は～」

5-4 「人物名（～動詞（連用形以外）」）→「人物名は～動詞（連用形）」例：人物名（笑う）→人物名は笑って

5-5 「人物名（サ変名詞）」→「人物名はサ変名詞＋して」

5-6 「人物名（動作の対象格となる名詞）」→「人物名は＋名詞を＋呼応する述語（連用形）」例：人物名（ため息）→人物名はため息をついて

5-7 「人物名（容態を表す名詞）」→「人物名は＋名詞で」例：人物名（小声）→人物名は小声で

6. 台詞の後に（）で指示書きがある場合

この場合は、「台詞を言った後に（）内の動作をせよ」との指示であると考えられる。

6-1 動詞の終止形で（）内の指示が終了している場合、前の台詞に続けて「と言う＋と、＋動詞（過去形）で終わる指示書き」

6-2 （）内が漢字1文字であれば漢字を使用して作られる動詞を連用形に書き換え、「ながら」という2つの動作・状態が並行して行われる意を示す接続助詞を挿入する。例 そんなあ（涙）→「そんなあ」と泣きながら言った。

7. 台詞の途中で（）で指示書きがある場合

この場合指示を実行するタイミングは（）前の台詞を言い終わった直後という明確な決まりがみられる。

7-1 （）内の指示に動作主が提示されていない場合

動作主は台詞の発言者であるとして（）内の指示の前にある台詞で一度台詞のかぎかっこを閉じ、指示内の動詞及び形容詞、形容動詞を連用形に直して接続する。その後、再びかぎかっこを提示して台詞を再開させる、という形で変換する。

7-2 （）内の指示で動作主が提示されている場合、

「と言うと」を挿入したのち、各パターンの変換方式に合わせて変換を行う。発言者とは違う動作主に対する指示が終了した時点で句点を打ち、発言者を改めて提示したのち残りの台詞を続けるという形をとる。

8. ト書き内で動作が連続する場合

脚本では、1行のト書きに書かれる動作が2つ以上になる場合もある。

8-1 同一人物が2回連続で指示を受ける場合、1つ目の指示にある動詞を連用形にして文を繋げる。

例：人物A、テレビをつける、嬉しそうな顔→人物

Aはテレビをつけ、嬉しそうな顔をした

8-2 異なる登場人物への指示が1行内で繰り返されている場合、主語を示す動詞は双方に対比の「は」を使用し、指示1つ目の動詞を連用形にして繋げる。例：人物A、立ち去る、人物X、安堵する→人物Aは立ち去り、人物Xは安堵した。

9. ト書き内で場所の指示がある場合  
場面がどこで展開されているか、という場所情報を提示する際は、単語のみで表される場合と、「にて」「で」など場所を表す助動詞を伴う場合の2パターンに別れることが多い。

9-1 単語のみの場合、場所を表す助動詞を加えたうえで、その後が続くト書きに接続する形で変換する。例：研究講義棟→研究講義棟で

9-2 場所を表す助動詞を使用している場合は、そのままその後が続くト書きに接続して変換する。

例：サークル棟にて→サークル棟にて、

10. 沈黙に関する表現

沈黙に関する表現は、台詞で表現するパターンとト書きで表現するパターンの2パターンがみられた。

10-1 台詞での表現の場合、三点リーダーのみで表現される。この場合、多くは特定の人物が他の登場人物からの呼びかけに意図的に答えない状況である。そのため、対比の助詞「は」を使用し、「沈黙している」を付加する。例：「人物名 ……………」→「人物名は沈黙している」

10-2 ト書きでの表現では「沈黙」とだけ書かれていることが多い。この場合、特定の人物が他の登場人物からの呼びかけに意図的に答えない状況であるのに加え、場にいる他の全員も発言しないことを提示したい状況であることが多い。そのため、「沈黙ののち」と動作主（＝誰が沈黙しているか）を提示しない形に変換する。

11. 場面転換の合図

脚本も小説も場面を立てながら物語を展開していくため、場面転換を示す文言が存在する。脚本は「1場、2場……」もしくは「1幕、2幕……」と、小説は「1章、2章……」と区切られることが多い。幕、また場という文言が出てきたら「章」に変更する。

### 3.3 自動的・機械的な変換が難しいもの

今回の小説化作業において自動的・機械的な変換が難しいパターンとして次の3点が確認できた。

1. 音の表現

脚本には、音の表現として、言語表現ではなく、舞台効果として音響指示、つまりどんな種類の音を出すかの指示が書いてあることが多い。小説への書き換えにあたっては、ト書きの指示する音を具体的にどのように言語で表現すればよいかを別途考える必要がある。

#### 2. 登場人物名でないが、人物を表す表現

「2人」「全員」「～たち」のように、登場人物名と完全一致しないが登場人物の誰かを指す言葉が用いられることもある。書き換えシステムを実装する場合には、この点について照応解析が必要になる。

#### 3. 舞台用語の排除

脚本では舞台上の演出を示すために特殊な用語（舞台用語）を使うことがある。舞台用語の中にはそのまま小説向けに変換しても、小説としては自然ではないものがある。脚本を小説に変換するうえで舞台用語を適切な語に置き換えるなど処理が必要になる。例えば、照明に関する「明転」「暗転」、動作に関する「ハケる」「入り（いり）」、位置に関する「上手」「下手」などの舞台用語は脚本においては意味があるが、そのまま小説に含めるのは適切でない。

### 3.4 その他、表記のゆれ

脚本は構造的に「台詞」「ト書き」「場面転換」がきちんと区別できれば成立し、どう区別するかには比較的自由度がある。そのため、同じことを表現していたとしても著者によって書き方が違う、いわゆる表記ゆれが見られる。さらに、個人の間でも書き方が確立しておらず表記ゆれが存在していることも確認された。今回調査した9名の著者に見られた主な表記ゆれは以下のものだった。

#### 1. 「台詞」の表記ゆれ

本論文では「登場人物名＋スペース」で台詞と認識することを標準としているが、台詞の書き方にはゆれがある。今回の9名の執筆パターンに見られたのは以下の3パターンだった。

登場人物名＋スペース＋台詞……4名

登場人物名＋「台詞」……4名

登場人物名＋：＋台詞……1名

#### 2. 「ト書き」の表記ゆれ

本論文では「登場人物名＋読点」でその行をト書きだと認識することを標準としているが、今回の9名の執筆パターンにみられたのは以下の4パターン

だった。

登場人物名＋読点＋指示……7名

登場人物名＋助詞「が」「は」＋指示……1名

登場人物名＋：＋指示……1名

また、ト書きのみ1段字下げするか否かも異なっていた。字下げするのが3名、しないのが6名であった。字下げをしない6名のうち、ト書き全体を（）で囲い台詞との区別を行っていたのが2名であった。

#### 3. 指示書きの曖昧性

3.2節で「台詞の後に（）で指示書きがある場合」は「台詞を言い終わったあとにこの動作を実行せよ」となるとしたが、指示の解釈が「該当する台詞を次の動作を交えながら発言せよ」を意図している事例も存在した。

これまで脚本の人による解釈ではこうした表記ゆれは問題視されておらず、上演する人間・団体が実際に脚本を読み前後の文脈を類推してきた。しかしながら、書き換えシステムを実装する場合には表記ゆれを解消する仕組みが必要になる。

## 4 おわりに

本論文では、これまであまり試みられてこなかった、脚本の小説化という観点から、脚本と小説の形式的、構造的な類似点や相違点を調査し、変換に必要な知識についての報告を行った。

特に、脚本において頻出する台詞やト書きの表現を区分し、小説への自動的・機械的な変換がやりやすい表現とその変換パターンの分析を行なった。また、逆に、変換の難しい表現とその理由の分析を行なった。さらに、脚本の著者たちに見られる表記のゆれにも言及した。

本来、情報量の少ない脚本から情報量の多い小説への変換では、台詞から感情やアクション、気持ちを推測しなければならない。より魅力的で良質な小説への書き換えでは、脚本に書かれていない事柄を推測したり、「解釈」を加えることも必要になる。この点について文学的、芸術的な要素が分析者の主観のみによって加わることを避けるため、今回は一般的な表現に限定したが、豊かな表現として、言い換える際の最適な言葉の選択や、より深いレベルでの脚本における表現技法を小説化に取り入れるための分析にも踏み込む必要がある。

---

## 参考文献

- [1] 内田美友, スタイルの違いに注目した脚本から小説への変換に関する一考察, 卒業論文, 東京外国語大学, 3.2022.
- [2] 金子遥渚, 松吉俊, 内海彰, 小説から演劇台本への書き換え過程のアノテーション, 言語処理学会第26回年次大会発表論文集, F5-1, pp.1141-1144, 3.2020.
- [3] 今誠一, 吉田文彦, 菊池浩明, 中西祥八郎, 昔話の自動シナリオ化システムの構築, 言語処理学会第11回年次大会発表論文集, P3-9, pp.317-320, 3.2005.
- [4] 小森陽一, 富山太佳夫, 沼野充義, 兵藤裕己, 松浦寿輝, 『物語から小説へ』「岩波講座 文学3」, 岩波書店, 2002.
- [5] 中村真一郎, 小説入門 人生を楽しくする本, 光文社, 1962.
- [6] 大岡昇平, 現代小説作法, 第三文明社, 1972.
- [7] 永江朗, 「なるには Books 33」『作家になるには』, ペリかん社, 2004.

## A 付録

### 使用脚本一覧

No.	タイトル	著者	公演時間(分)
1	(前衛的な, あまりに前衛的な) 僕たちの演劇は, 始まらない	A	90
2	ドアノブを回すほどの勇気を	A	15
3	四次元的恋路	A	15
4	統合された冗談	A	20
5	尿だけに	A	15
6	彼女は田んぼにつっこんだ	A	15
7	恋はサンマと吉野家と	A	20
8	17才	B	90
9	NO LONGER A STORY	B	75
10	そこにいるの?	B	10
11	ゆとり脳	B	15
12	わたしの歌を聴かないで	B	20
13	葵とミカエル	B	10
14	内緒の階段	B	90
15	僕の歌を聴いてくれ	B	15
16	明日家に帰ったら	B	90
17	この弦きを, あの子へ.	C	25
18	演劇ロボット vol3	C	75
19	許されたければ	C	15
20	コクハク	D	20
21	ジレンマ	D	15
22	脳科学研究会	D	15
23	HOT SPOT!!	E	75
24	引っ越し	E	20
25	鯨	E	90
26	レモン	F	30
27	赤い風船	F	20
28	誕生日を祝われたい	F	15
29	超いい感じ	F	15
30	底抜けに明るい, あるいはレモンの話	F	20
31	あの日の向こう側	G	75
32	必殺物語修正人!	H	60
33	Lzhets	I	15
34	スパイス	I	25
35	プラネタリウム	I	15
36	名前で呼んでくれ	I	10
37	追憶	I	25
38	純真な世の中で	I	30

公演時間は文字数をもとにして計算されたものである。